



「特集」

## 技

印象を継承しながら、新しい工夫と配慮を  
「明るく、心配りのある医院で地域医療に貢献」

### 前医院のイメージをベースに快適に

高岡市大鋸屋町にある炭谷内科医院は、ここで長く開業していた医院が閉院したため、その建物を改修して平成16年11月に開業した。炭谷院長は、長年総合病院に勤務されたキャリアのある医師である。

「前の先生と直接つながりはありませんが、継承開業と考え、元の医院のイメージをある程度残しながら工夫したいと思いました」と、炭谷院長は語る。

院長の要望に応え、患者さんが慣れ親しんだ待合室や受付などの配置は変えず、全体として明るく快適な空間にすることが求められた。ポイントは大天井、壁、床の張り替え、入り口やトイレの改装などである。

元の建物は昭和30年代に建てられたRC構造だが、床は木造だった。床面はレントゲンの機械の関係で下げることができない。そこで、支持脚を使った二重床システムを採用した。問題はレントゲンの荷重だった。

「メーカーに確認して計算してもらい、支持脚を規定の数以上に設置しました」と担当者。明るい木目のフローリングと扉、白いクロスとの組み合わせを提案し、清潔感と温もりのある印象となった。



車椅子用のステップを設けた入り口(上)と玄関から見た内観(左)。

### スムーズな診療と心配りを届かせる



診察室はクローズな空間のためプライバシーも安心(上)。従来と同じように畳の待合室(右)。



### スムーズな診療と心配りを届かせる

基本レイアウトは変えないといったものの、変えなければいけない箇所もあった。まず、レントゲン室の操作台だが、同じ部屋にあったのを外に出さなければならぬ。そこで、隣接する診察室に設置することにし、間の壁を開けて窓を付けることになった。

「RC構造の場合、レントゲン室の壁は15センチ以上となっていてます。ハツリが少し大変でしたね」と担当者。開口部には鉛の特殊ガラスをはめ込んだ。

患者さんが来院し、診察や治療をスムーズに受けるために、改良すべき点もあった。まず玄関の段差。床面が高いため、車椅子が乗りづらい。

「床に切り込みを入れて、ツーステップにしたんですよ。距離がないので、スロープにするのと下りが危険ですから」と院長。廊下もこれまでより広くした。その分受付が下がったが、受付の中にあつた部屋をつなげてひとつにして空間を確保した。

また、前は扉を開けると診察室で、その隣に処置室があつた。これでは、玄関から診察室が見え、患者さんの動線も悪いので、診察室と処置室を逆にした。

「処置室が廊下側にあると、看護師が受付や待合室の状況を把握しやすいんですよ。それと、患者さんの声が漏れないので、



炭谷内科医院の外観(上)と処置室(下)。

「プライバシーも守れます」と院長は言う。もちろん、必要な箇所には手すりを設置。トイレも新しく機能的な空間とした。

### 現場での要望にも柔軟に対応

炭谷院長は、現場を訪れては実際の診療を想定して細部まで工夫を考えていた。

「図面だけでなく、実際に自分で歩いてみると、どこにどんな問題があるのかわからないですから」

人がどう歩くか、車椅子がどう動くかをチェックする。そこで、ここに手すりを付けてほしいとか、検尿のコンの窓をここにほしいなどの要望が出る。

「改装工事は、現場での対応がポイントです。やってみて初めてわかることもありますから」と、担当者は言う。受付のカウンターの高さも院長と相談して、図面よりも少し高く設定した。

古い建物は、どうしても電気関係が不十分が多い。明るい空間にするには照明が不足しており、また従来より医療機械の種類が増え、コンピュータなども使用する。そのため容量を確保し、配線をやり変えるなどの電気工事が必要になる。

しかし、工事が始まったのは9月下旬。11月3日には見学会を開催する予定という厳しい日程だった。「住宅街なので、夜遅くまで工事するわけにはいきませんが、延長してやりました」

見学会では機械を動かすことはできなかったが、7日の開業には間に合わせた。炭谷内科医院には、前医院から継続して来院される患者さんも多いという。

「外観はほとんど変わっていませんが、玄関に入ると『明るくなったね』と言われます。待合室に入ると前と同じようなので安心されるようです」と院長。医院は、地域の人の新しい安心の場所となった。地域の信頼を受けて院長は多忙な日々を送っている。



技のリフォーム

イワサ ミセマス  
0120-183-304